

⑤ 川尻秋生 著

『平安京遷都 シリーズ日本古代史⑤』

(岩波書店)

さて、日本の政界の次なるトップは誰になるのでしょうか？ えっ、なんであの人か?! といっても民主党の話ではなく、平安時代が始まる少し前の話です。平安京生みの親、桓武天皇の即位は、天武系血統最優先の奈良時代の常識では無論想定外。そこに至るには様々な人の政治的な思惑と陰謀が重なり合い・・・、しかし即位したものの長岡京遷都はうまくいかず、じゃあ山背に遷都しようか・・・。千年の都京都是案外成り行きで生まれたような気がします。

210.3||Shir||5 (N.T.)

⑦ 梅棹忠夫 著 小長谷有紀、佐藤吉文 編

『梅棹忠夫、世界のあるきかた：ひらめきをのがさない!』

(勉誠出版)

本書は国立民族学博物館の創設に尽力し、初代館長をつとめた梅棹忠夫氏の資料類を写真と文章に焦点をあてて、再構成したものである。ステイ型のフィールド・ワークだけでなく、サーベイ型のフィールド・ワークに関する記録も大いに取り上げて、フィールド・ワークの極意にせまるものである。著者が世界をどのように見ていたか、どのような調査をしていたか、その考え方を知る教則本である。海外に出かける前に一度フィールド・ワークの実践例集である本書を読んでみてはいかがだろうか。

289.1||Ume (M.T.)



⑥ 伊藤孝博 著

『イザベラ・バード紀行：日本奥地紀行』の謎を読む』

(無明舎出版)

明治11年、まだ江戸時代の色濃く残る日本を旅したイギリス人女性イザベラ・バード。彼女の旅行記『日本奥地紀行』をもとに関東から東北、北海道まで彼女の足跡を正確に辿り、通った道筋、立ち寄った町や村、泊まった宿、眺めた風景を追い、出会った人々や遭遇した事件を想像し、その土地の歴史や民俗文化に詳しい人の話を聞きながら、紀行文を丁寧に考察する一冊です。

繊細な表現や感受性、鋭い観察眼、旺盛な好奇心と行動力などバードの人間性に惹き付けられ、その時々彼女の思いや感情を想像します。

130年前にタイムスリップして、日本の奥地を共に旅する気分になれます。

291.09||Ito (Y.S.)

⑧ 高三啓輔 著

『字幕の名工：秘田余四郎とフランス映画』

(白水社)

秘田余四郎は、フランス映画全盛期に、そのほとんどの字幕翻訳を担当。仏語のみならず15カ国語21カ国の映画の日本語版を手掛けたという華麗な字幕への移し替えにより、字幕翻訳の名工と謳われました。余四郎自身、映画好きではなかったようですが、放蕩と無頼の人生で深く関わった香具師の世界から得た義理人情の感覚、隠語や俗語といった豊かな日本語の言い回しを駆使しながら、歴史的な名作『天井桟敷の人々』の名訳を生み、後の仏文学者や字幕翻訳者に深い影響を与えたのです。

778.09||Tak (A.U.)